

随想

日々の想



ずいそう

ミュージカル鑑賞

小泉 ヒロ子



夏休みのある日、先輩の先生のお誘いで、ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」を鑑賞してきました。タイトルは有名でよく知っていましたが、ストーリーを知らないまま帝国劇場に向かいました。

主役、デヴィエは、西田敏行、わが福島県出身の俳優です。どうしても吉宗のイメージが強く、ミュージ

カルの姿など想像もつきませんでした。さすがプロ。歌と踊りも彼の個性にマッチしていて、永年森繁久彌が演じていた主役同様、すばらしい演技でした。

この「屋根の上のヴァイオリン弾き」は、今から九十年前のロシアの寒村、アナテフカが舞台です。主人公デヴィエは貧しいが働き者、酪農を営むお人好しで信心深く楽道家。しっかり者の妻と五人の娘たち。伝統やしきたりに縛られながらも、仲睦まじく暮らしていくのです。

人間にとって普遍的なテーマ「何よりも強い家族の絆とその葛藤」が貫かれています。

私が、芸術鑑賞に興味を持ち始めたのは、三十代半ば、友達と共に演劇鑑賞会に参加してからです。しかし、出産、育児に追われ、ここ四、五年その参加もできないでいました。去年秋に仙台で行われた坂東玉三郎の舞踊以来、また、興味が沸い

てきました。

この「屋根の上のヴァイオリン弾き」で一番心に残った歌は、やはりクライマックスの場面「陽は昇りまた沈む」でした。

その一節、

「いつの日にか私たちも

陽は昇り、また沈み、時うつる

よろこび、悲しみをのせて

流れてゆく」

人生そのもの、人間本来の生きざまをみて感動し、劇場を後にしました。

教師として十八年間勤務してきましたが、プロとしての自覚や努力は、どんな職業も同じなのだ、改めて

話す喜び

中村 幸裕



子供が複雑なことばの体系を短期間に、しかも完全な形で習得しうるという事実は、まことに驚嘆すべきことで、おそらくこれに心を打たれぬ人はいないであろう。

彼らは、ほぼ五歳までにことばのもつ基本的なことは習得し終わって

痛感しました。私もこれから教師としての本物をめざして、磨きをかけなければと自分に言い聞かせた夏の暑い一日でした。

今、次に楽しみにしている芸術鑑賞は、宮沢賢治生誕百年にちなんだ映画です。この秋、公開予定とか。

二学期、諸行事で忙しい毎日になりそうですが、是非、芸術の秋にふさわしい「心の栄養」を蓄えていきたいものです。そして子供たちにも、その栄養を与えてあげたいと考えています。

(安達町立油井小学校教諭)

言語の才能に恵まれていたからとか、親が特別に教えたからとか、家庭環境がよかったからとか、等々の理由とは全く無関係に、ただ子供が正常に発育さえしていれば、どの子供も等しく一歳半ぐらいの間に話し始め、五歳ぐらいまでには、大人とほぼ同じ程度に会話ができるように